

平成 27 年 6 月 9 日現在

機関番号：14401

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2013～2014

課題番号：25590158

研究課題名（和文）新しい災害互助システム「被災地のリレー」の構築に向けた現場研究

研究課題名（英文）Field Study for Constructing a New Disaster Relief System, Pay-It-Forward Network

研究代表者

渥美 公秀 (Atsumi, Tomohide)

大阪大学・人間科学研究科・教授

研究者番号：80260644

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,800,000 円

研究成果の概要（和文）：東日本大震災で確認された「被災地のリレー」（過去の被災地の人々が現在の被災地の人々を支援する現象）の社会心理学的意義を解明し、歴史・文化・民俗の文脈に位置づけて、新しい災害救援・復興支援モデルへと結実させるためにアクションリサーチを展開した。救援を受けたことに対する負債感が、救援を惹起し、リレーによって、救援側の復興が推進されることを確認した。多様な分野の文献を渉猟し、文化の影響を考慮すべきこと、リレーの全貌把握が困難であることを結論した。「被災地のリレー」の拡充を目指したアクションリサーチからは、リレーによって形成された個人的な関係に注目すべきこと、実践的には資金面に問題が明らかになった。

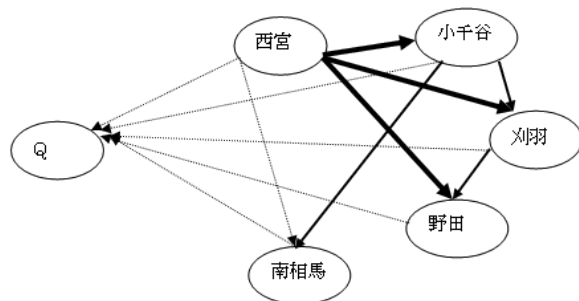
研究成果の概要（英文）：When a disaster occurs, local residents help each other and people, including disaster volunteers, from outside, support survivors and victims. The survivors attempt to pay the support back. However, they are likely to have no chance to pay it back, rather returning to their ordinary lives with some sense of debt. Later, once other disasters happen, they may attempt to forward it to someone else in the future (i.e., Pay-It-Forward Network, PIF network). The present project identified that socio-psychological sense of debt motivated people to help the new survivors, while helping the survivors led their own area to recovery. According to the review from various fields of research, it was concluded that cultural factors may influence the PIF network, and that it was difficult to obtain the whole picture of the large PIF network. Action research revealed that individual relationship formed through the PIF network should be maintained, while financial issues were critical in practice.

研究分野：ボランティア行動学

キーワード：被災地のリレー 災害救援 災害復興

1. 研究開始当初の背景

2011年に発生した東日本大震災の被災地では、阪神・淡路大震災(1995年)の被災者から支援を受けた新潟県中越地震(2004年)・中越沖地震(2007年)の被災者が、東日本大震災の被災地で支援活動を展開する興味深い事例があった(図1)。これは、過去の被災地が現在の、また将来の(図1ではQと表示)被災地を支援していくネットワークとして表現される。申請者は、こうして、過去の被災地から、次の被災地へと、支援活動があたかもリレーされているようなこの現象を「被災地のリレー」と称して、その存在を報告してきた(渥美,2012; Atsumi, 2012)。研究開始当初もリレーが継続されていたことを承け、これを協働的实践とアクションリサーチを通じて、新しい災害救援・復興支援モデルへと結実させていく着想を得て、本研究を開始した。



という指摘からは、刈羽村で刈羽村の人々が、復興に向けて歩みを始める姿が見られた。

野田村では、研究期間中に東北地方以外で水害が発生した際、「お返しにリレーをしなければ」という声が聞かれ（実際には救援活動は実施されなかったが）、将来にリレーを行う機運が観察された。

(2). 社会心理学・進化生物学・民俗学等の文献渉猟

互助関係の連鎖、利他行動をキーワードに、社会心理学、進化生物学、民俗学に加えて、哲学、社会学、教育学、行動経済学などにも視野を広げ、研究会を設置して、それぞれの分野からの研究動向を集約した。表1は、三者(A,B,C)間の利他行動のパターンを示したものである。各研究分野で関係の呼称は異なるが、それぞれ注目する他者を特定して、実証的研究、歴史的研究、シミュレーション研究などが展開され、その理論的含意が検討されてきた。ただし、表1にいう逆行的互惠性は、他の2つに比べて、研究の深まりが比較的乏しいと考えた。

表1 利他行動の流れと被災地のリレー

関係	利他行動の流れ	対応する現象	注目する他者
逆行的互惠性	$A \rightarrow B \rightarrow C$	被災地のリレー	未来の他者
順行的互惠性	$A \rightarrow B, C \rightarrow A$	情けは人のためならず	過去の他者
模倣	$A \rightarrow B, C \rightarrow B$		現在の他者

このように整理すると、「被災地のリレー」は、日本の伝統社会に見られる互助関係と似て非なる行動であること、また、リレーを利他行動の受け手が、他の人に利他行動を行うと捉えた場合、この現象について研究結果に一般的な合意は見られないことが明らかになった。

また、文献調査の結果、こうした互助関係・利他行動が、当該文化の影響を受けるであろうこと、また、連鎖が少数の場合には、1つ1つ検討することが可能であるが、連鎖が多数になると、その全貌を把握することは困難であることが予想された。

(3). 災害NPOと協働して「被災地のリレー」の拡充を目指したアクションリサーチ

具体的には、刈羽村から野田村へのリレーについて、その返礼にあたる野田村から刈羽村へのリレーを企画し、その前後の聞き取り調査を実施して、リレーの継続には返礼が効果的であることを確認した。

一方、小千谷市塩谷集落（中越地震の被災地）から、福島県南相馬市（東日本大震災の被災地）へのリレーを改めて企画・実施し、

その維持過程に伴う困難を把握した。その結果、「被災地のリレー」は、その名称の通り、「被災地」間で行われるが、特定個人を対象として開始されるのではなく、被災地（の人々）というカテゴリーに対する活動として開始されること。しかし、リレーの返礼は、リレーによって形成された個人的な関係を含む被災地間の関係を維持していくことに對して効果的であることが明らかになった。

リレーを実施するには、資金面での工夫が必要であることも改めて示唆された。被災地への資金（義援金等）は、多く集まるのが通例であるが、当該被災地への救援活動がある程度終わってから、新たな被災地への救援活動（被災地のリレー）のために、資金をどのように調達するかといった実践的な問題を今後検討する必要がある。



写真1 小千谷市塩谷集落から福島県南相馬市への被災地のリレー

以上の成果をもとに、現在実施されている被災地のリレーの事例をさらに収集するとともに、学際的な知見を集約する必要は言うまでもないが、本研究を萌芽として、次年度以降に、国際比較研究やシミュレーション研究を計画し、被災地のリレーの文化的規定因を解明するとともに、リレーが拡充した際の連鎖の全貌を把握し、その変化に寄与する変数を特定することを目指したい。そうした総合的な研究が進むことによって、「被災地のリレー」は、新しい災害救援・復興支援モデルへと結実することになり、理論的にも、実践的にも、今後の被災者対応に寄与すると確信している。

<引用文献>

Atsumi, T. (2012) Don't Pay it Back but Forward: A Possible Strategy to Produce Further Improvisation toward a Paradise. Response, Recovery and Preparedness Issues of the 2011 Tohoku Japan Earthquake from the Perspective of Human Sciences at The Third Conference of International Society for Integrated Disaster Risk Management. Beijing, China.

渥美公秀(2012) 被災地のリレーから広域ユイへ 人間関係学, 11, 1-12

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 4 件)

Atsumi, T., & Goltz, J.D. (2014). Fifteen Years of Disaster Volunteers in Japan: A Longitudinal Fieldwork Assessment of a Disaster Non-Profit Organization. *International Journal of Mass Emergencies and Disasters*, 32(1), 220-240.

Yamori, K. (2014). Revisiting the Concept of Tsunami Tendenko: Tsunami Evacuation Behavior in the Great East Japan Earthquake. *Natural Disaster Science and Mitigation Engineering*, 49-63.

Atsumi, T. (2014). Relaying Support in Disaster-Affected Areas: The Social Implications of a “Pay-It-Forward.” *Disasters*, 38, 144-156.

渥美公秀(2015) 未来の他者への返礼 未来共生学, 2, 111-125。

〔学会発表〕(計 4 件)

Atsumi, T. (2013) Survivors Centered Approach toward Long-term Disaster Recovery: Collaborative Practice and Action Research after the 3.11 Earthquake and Tsunami. The 4th International Conference on Integrated Disaster Risk Management. New Castle, UK.

Atsumi, T. (2014). Roles of “Things” in the Process of Recovery from the Great East Japan Earthquake and Tsunami. The 74th Annual Meeting of the Society for Applied Anthropology. Albuquerque, USA

渥美公秀(2014) 災害復興に関する試論：＜いま-ここ＞の重層化 日本グループ・ダイナミックス学会第 61 回大会 東洋大学 東京

Atsumi, T. (2014). Collaborative Practice and Action Research toward Recovery from the 3.11 Earthquake and Tsunami. The 5th Conference of Integrated Disaster Risk Management. Ontario, Canada.

〔図書〕(計 2 件)

渥美公秀(2014) 災害ボランティア：新しい社会へのグループ・ダイナミックス 弘文堂(285 ページ)

矢守克也(2013) 巨大災害のリスク・コミュニケーション：災害情報の新しいかたち ミネルヴァ書房 (234 ページ)

〔その他〕

ホームページ等：なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

渥美公秀 (ATSUMI, Tomohide) 大阪大学大学院・人間科学研究科・教授

研究者番号：80260644

(2) 研究分担者

矢守克也 (YAMORI, Katsuya) 京都大学・防災研究所・教授

研究者番号：80231679